

授業方法について独自に工夫していること 【教育科学系】

教育学の専門的な研究方法に関する入門的な授業なので、方法論を一方的に講義するのではなく、実際に学生に研究テーマ(のようなもの)を設定させ、その研究テーマを追究するなかで研究方法を実践的に理解でき体得できるような進め方とした。

反転授業とまではいかないが、前の週に課題を出し、一週間かけて課題に取り組ませ、当日の授業では一週間の取り組みについてグループ内でディスカッションさせ振り返らせる、という方法で進めた。

ほぼ全部の授業において、学生主体の授業を実施している。3回提出してもらったレポートは採点基準を厳密にし、フィードバックを行い、書き直しをさせている。

なるべく多様な観点から話ができ、多くの人の意見を聴ける場にしたい(特定に考え方に誘導しないように)見やすい資料作成とその説明を心掛けている(実際そうになっているかどうかは分からない)

・最新の医療情報を収集し、常に新しい情報を取り入れた授業内容になるように工夫しました。
特に厚生労働統計協会が毎年8月末に発行している「国民衛生の動向」の統計資料等に基づき、最新の情報を学生に提示しつつ、さらに小児保健の領域に関する資料を配付して説明し、より小児保健に対する理解を深められるように配慮しました。

・学生の気づきを互いの学びにすため、グループ討議の時間を設け、「なぜそう考えたのか」を発表する機会を頻回設定しました。

学生が、課題について、自ら調べて、それを表現し、学生同士で討論して、理解を深めるようにしている。

パワーポイントで要点を示し、教育現場での写真や動画等、映像を取り入れて授業を進めてきた。受講生が卒業年度であることを踏まえ、幼児教育にとどまらず、教育全般に係わる質問も取り上げて答え、学生生活終了後の人生においても参考にしてほしいといった思いを込め、多様な事例をあげて授業を進めた。

すべての授業で大きな目標にしているのが、講義を受けた後で、「多様な考え方ができるようになる」ことである。今回のアンケートでは、問6の設問が本目標に近く、この比率は高かったため、目標はおおむね達成できたと考えている。また、授業の進め方についても、問8-問10や問13の比率が高かったため、方向性としては大きな問題はなかったと思われる。

具体的な授業方法については、特別なアクティビティ(グループワークや体験授業のようなもの)よりも、まずは、講義内容が学生にとって興味深いものであることが大事であると考えている。内容が興味深ければ、学生は通常の座学であっても90分間思いこふけりながら、よく考えているように見える。私の専門から言えば、実際の臨床例をお話する、ユーモアを交えて説明する、ストーリーを話す、表やグラフのデータを提示する、断定的な結論を控え、むしろ問いを投げかけるような場面を大事にする、などである。

学生同士が対話をする時間や、グループで話し合った結果を発表する時間を設け、多様な価値観を共有できるような機会を作っている。

専攻の異なる4年生対象であるため、特に基礎的知識はもとより、保育実践映像を活用するなど「学びの連続性」を意識した幼保小連携につながるような講義内容を心掛けた。また、学生自身が体験し実感することができるような授業を3回設けることで、より学びが深められるように努めた。

・演習科目では、ロールプレイやグループワーク、グループディスカッションなどを多く取り入れ、知識と体験をもとに授業内容が理解されるようにしている。

・講義科目では、できるだけ時事問題を取り上げながら解説を行っている。また、理論的な内容については補足資料を配布し、事例を示しながら解説を行っている。

演習科目でもあり、学生自身の体験から省察した実践事例についてグループディスカッションすることで、多様な考え方や気付きが深まるよう心掛けた。また、行事による幼稚園参観を通して、理論と実践の統合を実感すると共に、より深い学びにつながるよう努めた。

本実習は、各自が卒業論文で扱いたい研究テーマについて深く掘り下げ、学生主体で検討することを目的としている。そのため、教員は先んじて決定的な意見を言わないように留意した。ただ、意見がなかなか出ない場合もあり、その場合は発表者の討論希望点を確認・拡張したり、教員から別の視点からの討論点を指摘するように配慮した。

視覚的に示してわかりやすくしている。
体験談を踏まえ、かつ学生が自分自身に引き付けられるような資料を使用している。
五感を通じて感じたほうがつかめる当事者の苦悩、生活などは映像で示している。

できるだけ具体例を挙げ、興味を持てるように、また、できるだけ系統だった知識を提供できるよう心がけた。また、なるべく平易な言葉でゆっくり話すようにした。板書は要点のみを簡潔に書くように心がけた。一方通行の授業にならないように、適宜、質問等を行ったり、理解を深めるため必要に応じて計算をさせたりした。

- ・本科目は、5名の教員によるオムニバス形式の授業である。授業方法としては、3年次の演習科目につながるよう各回担当者がディスカッション形式で授業を進めている。
- ・授業内容は、教育学を構成する諸領域(各教員の専門)に即して組まれている。

授業内容のテーマごとに担当者(学生2名一組)を決め、教員が授業の3週間前から事前指導を行う。担当者は調べ学習を中心に準備をする。
授業当日は担当者が授業を行い、内容の不足分や現場の実際例は教員が補足や説明をする。その後より現場に近い場面設定をし、実習を行う。

近隣の公立幼稚園にご協力いただき、子どもと過ごす時間を設けている。また、園長先生との質疑応答の時間もあり、授業での説明と、実際の子どもの様子をリンクさせて総合的な子ども理解に繋がられるようにしている。
体験的に、AIによる学びが大きいと感じている。保育事例等を提示し、個人で思考した後にグループディスカッションを行う。各グループで出た見解はシェアリングすることで学年全体の共通理解とする。グループにおける思考過程は、全てコピーをして配布しており、得た知識や新たな考察をなるべく逃さないようにしている。

授業以外の時間にも学生から質問や連絡を受けられるように、メールアドレスを公開した。また、資料配布において、印刷物だけでなくPDFファイルも利用した。それにより、印刷物では見にくくなってしまいうような資料を見やすくすることができ、また多くの資料を配布することができた。

学生が自分の経験をふまえ、できるだけ現実的に想像できるよう、具体的な資料を作成すること。
前半は、知識を講義すること、上記の具体的、現実的な理解がうながされることを中心とし、後半は、前半で得た知識を、実践で役立てられるよう、より具体的な事例を示しながら、学生自らが考えて、解決策を模索するため、グループ討議、全体討議を中心に行った。